キョン子の憂鬱

キノピコ・キノピオ・ルナサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キョン子の憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ４５１１ＢＡ

【作者名】
キノピコ・キノピオ・ルナサ

【あらすじ】
夏休みを３日後にまで迫っているというのに、俺を女にしてハルヒお前は何がやりたいんだ？

キョン子の憂鬱　その１（前書き）

※この小説はド素人が人生ではじめて書いたものです　不満な点などがあると思いますがどうぞご覧下さい

キョン子の憂鬱　その1

登場人物
涼宮ハルヒ　神的能力を持つが自覚無し
キョン子　キョンが女体化した姿
妹　キョン子の妹
谷口　ナンパが趣味のキョン（キョン子）の悪友
国木田　成績優秀の美男子

それは蝉がみんみん鳴いている夏休み3日後にまで控えた朝のことだった。
「キョンちゃ～ん　朝だよぉ　おきてぇ」
「ゴハッ！」
いつも通りに妹は必殺フライングボディプレス（※）をやってきやがった　もう少しは手加減しろ
というか今キョンちゃんって言ったよな。
我が妹よ俺をそんなにバカにしたいか。
「キョンちゃんてばぁ～」
「誰がキョンちゃんだ　お兄様と呼びなさい」
「えぇ～　キョンちゃんはお姉ちゃんでしょ～　変なキョンちゃん」
お姉ちゃんのことについて言おうと思ったがシャミセンが妹に誘拐されてそのまま外に出て行ってしまった。
ムクリと起き上がり
「まったく最近の妹はココまでバカにするようになったか」
このとき少し声が変だなと感じたが寝ぼけているせいだと思いそのまま洗面台へ向かった。

話は変わるが人によって、歯磨きを食べる前にする人と食べ終わったあとに歯磨きをする人などといるらしい。俺の家族は食べる前に

歯磨きをする派である、よって今洗面台に向かっているわけである。
洗面台についた俺は歯磨き粉をつけて鏡のほうを向いて磨き始めた
時、異変に気づいた。
「ん・・・・・なんで鏡に女性が映ってるんだ？」
目をこすってもう一回確かめる、そこには長髪の女性の顔があった
「えっと・・・・・これって間違いなく俺だよな」
頬を引っ張ったり髪を触ってみたりしてみたがどうやら本当に俺らしい
「そりゃあ、妹にお姉ちゃんって言われるわな」
声もどこかかわいらしい声に変わっている
そこで誰がこんな状況を作ったのかわかった
「ハルヒの仕業か・・・・・」
あいつが望んだのだろう、ということはあいつがお気に召すまでこのままということだ。
「やれやれ」
厄介なことになったな・・・・・・・

その後歯磨きを済ませて朝食をとり始めた
いつもと同じ分量なのに半分食べてお腹が受け入れを拒否した
どうやら女性になったに合わせて胃が縮んだようである
「ごちそうさま」
といった後着替えをするために部屋へ戻った

髪は自然に「ポニーテール」で結ぶことができた。問題は制服である
「これどうやってきるんだ？」
女性用セーラー服の前にして考える
ココをこうして　こうやって・・・・
ようやく着れた、１０分もかかった
この時間だとゆっくりしている時間はなさそうだ

そのままバッグを持ち
「いってきまーす」といつも通りの時刻に家を出た
それにしても暑い、お天道様ももうチョイ手加減してくれませんかねぇ
現在の気温は29度である
「暑い上にいつも以上に疲れる」
例の強制ウォーキングコースである
女性になったに合わせて、体力のほうも落ちたようだ
「でもスカートなだけましか」
スカートの中を風が通り涼しさを感じるが突風には気をつけたほうがよさそうだな、スカートがめくれて谷口にでも見られたらたまったもんじゃない。
ふと谷口や国木田などのことが頭に浮かんだ
「あいつらまで女性になってるとかないよな」
俺は辺りを見回した。この時間なら近くにいるはずだ。見回しながら探していると・・・・・・・
「よぉ～キョン子、どうした辺りを見回して？」
「キョン子ちゃん、おはよう」
声をかけてきたのは谷口と国木田である、どうやらこいつらは何の変化もないらしい。
「ん？いやなんでもない」
「男を探していたのか？とうとうキョン子にもやってきたか・・・・・・・」
なんでそうなる　だがそんなことを言う谷口をスルーして
「国木田今日は何日だ？」
家で確認し忘れてしまったのだ
「え・・・・・7月一一日だけど、どうかしたの？」
「いや・・・・用事を思い出してね」
「デートか？」

谷口が首を突っ込んでくる
「そんなわけない」
「でもお前、意外ともてるじゃんか？クラスの男は目をつけていると思うぜ」
「意外とは失礼だな」
「すまんすまん、でもお前って不思議だよな誰も告りに来ないじゃん　俺があっちの立場のときはＡ－（マイナー）つけてたぐらいだぜ」
どうやら
「今のところ隠れファンも結構いるみたいだぜ。でもお前俺がナンパしたとき断ったしまさか告られても断っているのか？」
ということは女性の俺が谷口との接点を持ったのはナンパを断ったときということか
「告られたことねぇよ」
「そうかそうかそんなに隠したいんだなよぉーくわかったさ」
なにがだ
「話に戻るけどさぁ　お前をナンパした後、何人かに・・・・・・・・・」
この後谷口のナンパ話を延々と聞かされて
ようやく校門に着いた　校門に着いたときには体が完全に疲れ切っていた

（※：涼宮ハルヒシリーズより）

２話へ

キョン子の憂鬱　その１（後書き）

こんなド素人が書いた小説読んでくれて本当に有難うございました
次回分は現在ノートに鉛筆でカリカリと下書きを書いているところであります
なるべく早めに投稿したいと思いますのでしばらくお待ち下さい
誤字などがございましたらお知らせ願います
ご意見やご感想などおまちしております

キョン子の憂鬱　その2（前書き）

見る前に注意事項です
・多少のキャラ崩壊がありますご注意下さい
・ド素人が学校の放課などを使って気ままに書いたものです
・コレを読む前にその1を読むことをお勧めします（話がそのままつながっているため）
以上のことを理解の上でご覧下さい

キョン子の憂鬱　その2

登場人物
キョン子　キョンが女体化した姿
涼宮ハルヒ　神的な能力を持っているが自覚していない
長門有希　情報統合思念体によって作られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース　ようは宇宙人
古泉一樹　超能力者（それだけかよ

俺はタオルで（なぜかカバンに入っていた）汗をぬぐいながら谷口と国木田と一緒に教室に入った
席も変わっていないようだな。
俺はいつもどおり席に座りハルヒのほうを向いた
ハルヒは俺が来たことに気づいていないようでボーっと窓の外を眺めている。
顔を見るからに今までの経験上だと何かを考えているようだったが一応
「外を見てどうした？」
と聞いてみる
ハルヒはビクッとしてこっちを向いた
え・・・・俺って今なんか変なことしたか？
「な・・な・なんでもないわ　考え事よ」
俺何にもしてないよな　ただ声かけただけだよね？
「考え事って何だ？」
「みくるちゃん「とか」に着せる服を放課後もってこようと思ってね。何にしようかって迷ってたのよ」
「そうかい」
また朝比奈さんの叫び声のＢＧＭを聞きながら部室の外で待機することになるとは・・・・・・・・・・・・

いや・・・待てよ俺は今女の子だから部室の中にいても問題ないよな　フフフフフ・・・・・・・・・・・・・・・
おい待て待て俺正気に戻れ
「そういえばあんたいっつも朝は顔色悪いわね、朝に何かしてるの？」
毎日朝顔色が悪い・・・・・・・か　強制ウォーキングコースにまだ慣れていないのか　この体は
「何かしてるも何も朝からあの坂を歩いてるからな」
「ふーん」
「やっぱりあんたって体力無いわよね」
「悪かったな」
「ホームルームはじめるぞー」
ここで岡部が入ってきて会話終了
色々と確認したいことがあるから授業が終わった後昼休みにある人のところへ行くとしよう

今日の昼間での授業のほとんどを寝てすごした俺だが先生に見つかることは無かった
昼休みが訪れて弁当を持って真っ先に部室へ向かった
このことについて分かりそうな奴に話を聞くためだ
長門だ。この時間なら古泉もいないだろうと思ったからだ
ハルヒに捕まることなく部室に到着
看板も文芸部の上から手書き感満載の「ＳＯＳ団」と書かれた紙がテープで止められてゆらゆら揺らめいている
俺は習性的にコンッコンッっとノックをした
「あ・・・・・はい」
返事がかえってきたどうやら古泉のようだ
また古泉の意味の分からん論文みたいなのを聞かなければいけないと思うと頭が痛くなる
ガチャッ

ドアが開いた
古泉は俺を見てびっくりしたのか一瞬目を見開き
「え～と　どちら様でしょうか　涼宮さんなら留守ですよ」
「俺だ　キョンといえばわかるか」
「あ～　あなたでしたか　失礼」
「お前は俺が元々男ということを自覚しているのか？」
「えぇ昨日までは普通にいらしていたじゃないですか」
「立って話すのも何ですしとりあえず昼食を食べながら話をしましょう」
「あぁ」
そのまま弁当を持って部室へと入った
長門はやはりいた　１マイクロのずれもない場所で本を読んでいる
「それにしてもずいぶんかわいいお方になりましたね」
いつもの営業用さわやかスマイルをぶつけてきた
「うるさい、黙れ」
「おおw　怖いw怖いw」
といって苦笑いする古泉をスルーして俺は長門に近寄った
「長門これをやったのはハルヒか？」
長門は顔も上げずに
「そう」
やっぱりか
「僕はあなたがこのままのほうがいいと思うのですが」
「黙れ古泉」
「はいwはいw」
なぜか気持ちよさそうにしている古泉
気持ち悪いからその動作はやめてほしい
長門が急に立ち上がった
「長門どうかしたか？」
「なんで・・・・・・・」
こっちに近づいてきたどうしたんだ？

「なんで女の子になったの？」
何で肩をつかむ
「何でといわれても」
「なんで？・・・・・・・・」
「なんで？・・・・・・・・・」
何で顔を近づけて言う
「長門・・・　怒ってる？」ちょっとかわいさを出していってみた
「・・・・・・・・・・・・」
「怒って・・・・・・・・・　いない」
なぜ背を向ける・・・・・・
「どうした長門　何かあったのか？」
と顔を確かめてみた
・・・・！？
長門・・・　なんで頬を赤らめて鼻血だしてんだ！？
「長門ってそんなキャラだったか？？」
その後視線に気づいた
「いやぁいい写真がとれましたよ」
「ご馳走様です」
古泉ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ
お前は何なんだ　何で写真とってやがる
「なんで写真撮ってんだ・・・・・・・・・よ！」
古泉に蹴りを一発お見舞いした
しかし女の子となっている今そんなに威力はない
「いたっ　でもコレがまたいいんですよねぇ　もっとやってほしいくらいですよ」
「！？」
古泉・・・　お前はMかよ　M体質の変態かよ！
もうどうなってんだよ・・・・・・・・

３話へ

キョン子の憂鬱　その２（後書き）

無事その２を完成させることができました
現在その３を頑張って鉛筆を持ってカリカリと書いています（下書きですが）
次回は来週になりそうです

最後まで読んでくださり本当に有難うございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4511ba/

キョン子の憂鬱

2012年1月14日01時51分発行